人文学部生による読書案内

人文学部の学生が「人文学を学ぶための100冊」から1冊を選んで作成した読書レポート例を、プレゼンテーションを考えるときの参考資料の一つとして掲げます。

こちらはレポート例であり、プレゼンテーションの模範例ではありませんので、ご注意ください。

北海学園大学人文学部

2025年

本田弘之・岩田一成・倉林秀男『街の公共サインを点検する―外国人にはどう見えるか』大修館書店、2017年

日本文化学科1年　Tさんの読書レポート

外国人にとって日本語は、会話程度であれば習得にはそれほど時間を要さないが、「読む」ことはとても難しい。だが、私たちが日常生活の中で情報を受け取るシーンでは、標識・看板・ポスター・貼り紙といった文字を主とした視覚的な情報、つまり「サイン」が行動する際の頼りとなっている。日本語を母語としない人たちにとって街中のサインは、買い物や移動ではもちろん、災害時や緊急時の行動の大切な情報源となるだろう。そこで、外国人に日本での日々を安全に、また快適に過ごしてもらうためには、外国人にもわかりやすいサイン掲示をする必要がある。

本書では、外国人でも容易に理解ができるサインとはどのようなものか、また、街で見るサインは的確に情報伝達の役割を果たせているのかを点検し、日本のサインが抱える問題点の指摘・改善策の提案を行っている。

ここまでにもたびたび登場している「サイン」の中の「公共サイン」に関しては、様々な自治体・団体により分類のガイドラインが制定されているが、その中でも最も影響力の強い国土交通省が制定する、①誘導サイン類、②位置サイン類、③規制サイン類、④案内サイン類という4つの分類にもとづき各章で論じられている。また、一見公共サインのように見えるが、実際は①～④のいずれにも当てはまらないようなものにも言及がされている。

まず①の誘導サイン類は、施設等の方向を指示するのに必要なサインと定義されている。本書では、それらのサインについて空港や鉄道駅といった公共交通機関の施設を軸に議論が展開されている。比較対象のヨーロッパと比べて、日本はサイン掲示のルールが定まっていないため、ローカルルールの出現などにより公共サインの機能である情報の伝達に支障をきたしている。筆者たちはこれらのルールを整備することに加え、グローバル化に伴う言語障壁を乗り越える方法としてピクトグラムの採用を挙げている。防災のためのサインについても整備途中のものが多いため、避難場所を表すピクトグラムや用語の統一も行っていくべきだとしている。

施設等の位置を告知するのに必要なサインである②の位置サイン類について、街中でよく見かけるものには英語訳とローマ字の読みがついていることが多いが、実は在住・訪日外国人ともに英語話者は少なく、日本語ができる人が1番多い。さらに在住と訪日では必要な情報の量や内容に大幅な差がある。そのため筆者たちは、在住外国人には英語やローマ字だけでなく、簡単な「やさしい日本語」を使用するという選択肢を、訪日外国人向けにはスマートサインやピクトグラムなどの導入という選択肢の提案を行っている。

③の規制サイン類は、利用者の行動を規制するのに必要なサインである。特に注意喚起のサインは現在、街中にあふれかえっている。しかし注意喚起は数が少ない時、つまり目立っている時にその効果を発揮するため、これが多く存在していると、注意喚起としての役割は薄れ、重要なサインが見落とされてしまう可能性が高くなっている。そのため、サインの目的を1つに絞り、文章の工夫やイラスト・写真の活用をすることによって不必要な注意喚起文を削減することが重要であるとされている。

最後に④の案内サインは乗降条件や位置関係等を案内するのに必要なサインとされている。本書では、これからの公共サインの方向性として、多言語化を進めるのではなくピクトグラムを積極的に利用していくべきだと繰り返し主張されてきた。実際、ピクトグラムが少しずつ統一されてきたことにより、案内サインによる場所の探しやすさは改善されてきた。しかし、案内サインをさらに2つに分類した際の一方である「取り扱い説明」(トリセツ)は、その使用が困難な状況も依然として多い。操作方法が複雑になると文字で説明するための多言語化が必要となるが、スペースや経済性、手間といった様々な問題が障害となってしまうからだ。それらの問題を解決する最善の方法としては、タッチパネル式「デジタルサイネージ」の導入が挙げられるのである。これを使えば、多言語を用いた「トリセツ」の表示が可能となり、多くの訪日観光客に楽しい旅を過ごしてもらえるだろう。また、分類のもう一方である「案内マップ」は、従来型の案内サインでは役割が不十分なため、大規模なショッピングモールなどでも使える新たなタイプの案内マップをデザイン、開発することが必要となる。そして、近い未来、スマートフォンやスマートグラスで使われる新しいサインの可能性も示唆されている。

本書は、誘導・位置・規制・案内の4つのサイン分類ごとに話が展開されており、「外国人にも伝わるサイン」とはどのようなものかを日本のサインの問題点などを交えつつ考察・紹介している好著である。また、各章において国内外問わず実際の街中のサインの写真が掲載されているため、取り上げられている事例への解像度をより上げることができ、さらに関心を持った読者は、文献のみならず自分で直接サインを探しに行くこともできる。外国人に対する公共サイン、特にピクトグラムを使用した災害時の対応やその後の避難所での情報提供のシーンでどのようなピクトグラムが外国人への情報伝達に有効なのかを、本書を通じて考えていただけるはずである。

中村桃子『女ことばと日本語』岩波新書、2012年

日本文化学科2年　Kさんの読書レポート

はじめに

世界には、″女らしさ″や″男らしさ″という概念のもと、それらを求めるジェンダー的な考えが多く存在している。日本でも、女性に対して丁寧な所作、丁寧な仕草などが求められる場面が多く見受けられる。それは言語の観点からしても同様であり、日本には女性らしい丁寧な言葉遣い、いわゆる「女ことば」が存在し、女性はこのような女ことばを話すべきだと考えられてきた。このような歴史を踏まえ、なぜ「丁寧」と「女ことば」はここまで深く結びついているのか、という疑問が生まれた。そこで、言語とジェンダーを専門に研究を行っている中村桃子の著書である『女ことばと日本語』を読み解いていきたい。本書では、女性がつかうべき女らしい言葉とされる女ことばの歴史が取り上げられ、その背景にある近世から現代までの日本社会の価値や規範、庶民の憧れや国家イデオロギーが解き明かされている。各時代のさまざまな言説と、言語学やジェンダー研究の知見から、「女ことば」の魅力と不思議を知ることができる。

要約

日本では女ことばの成立について、長い間女性が男性とは違う女らしい言葉を使い続けたため、それが女ことばになったという理解がなされている。しかし、この考えにはいくつかの問題点、それに付随する問いが生まれる。

1点目は、千差万別である女性の言葉遣いがどのようにして、1つの女ことばにまとまったのかという問いだ。答えになるのは、女房詞の存在である。当初の女房詞は社会階級に結びつくものだった。しかし、次第に「女房詞は女が話すことば」という言説が流れ始めると、取捨選択された女房詞をまとめた女訓書が出され、規範として女性の言語行為を支配するようになった。こうして、女ことばはひとつにまとまっていった。

2点目は、「女性はこのように話すべきだ」という女ことばの規範はどのようにして生まれたのかという問いだ。女訓書のような当時のマナー本では、女性は話すことすら禁止されており、支配されるべき対象とされていた。その後、「つつしみのある女は喋らない」という言説が常識として流布するようになった。このように、女訓書による女性の言葉遣いの規定は、形を変えつつ鎌倉時代から明治期、そして現在にまで続いている。

3点目は、メディアはなぜ女ことばの知識を発信してきたのかという問いだ。この問いの背景には、政治・性・メディアにかかわる社会変化がある。当時、女学生はセクシュアリティ化される一方で、良妻賢母としての規範も求められため、理想が詰まった実態のないアイコンとなっていた。その為、男性や読者などに望まれる形の女学生の姿、女ことばをメディアは言説として伝えていた。

4点目は、女言葉に与えられた伝統的価値についての問いだ。日本は戦時中、国民を統合する必要があった。そこで、女ことばを天皇制と結びつけ、日本の優位性を示すことで女ことばに伝統的な価値を与えた。そして、女ことばこそが日本の誇りであるという言説のもと、女性国民に対し、女ことばの伝統を守ることが期待された。

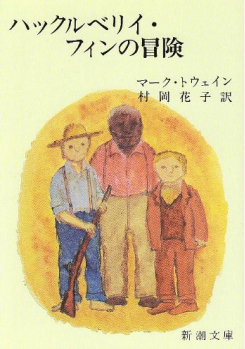
これらの問いは、女性が自然に話している言葉がそのまま女ことばになったという考えでは解決に至らない。女ことばが持つ規範・知識・価値などの体系であるイデオロギーを成立させた言説こそが、女ことばを作り上げたといえる。

考察

本書を読み、女ことばは女性が話し始めたのではなく、規範によって制限された話し方や理想とされた話し方を女性が話すようになった結果、それが女ことばとしてまとめられたことが分かった。つまり、もともと女性の話し方と丁寧さは結びついていなかったということになる。そこで、女性の話し方と丁寧さが結びついた背景を考えると浮かび上がってくるのは、「女訓書」の存在である。現在の女性の話し方のもとになっているのは、女訓書の中で求められた「つつしみのある話し方」である。この際のつつしみとは、「多くを語らないこと」を指す。現在も、この規範を引き継いでいる多くを語らない女性の話し方は丁寧とされている。そこで、現在丁寧とされているのは「女性の話し方」ではなく、「多くを語らない話し方」であるというのが、本質であると私は考える。そのため、男性であっても多くを語らないつつしみのある話し方をする人は、丁寧とされるのである。では、なぜ女性と多くを語らない話し方は深く結びついているのか。それは、「多くを語らない女性の話し方」が、伝統として受け継がれているからである。女性の間で、丁寧な話し方が長い間受け継がれていることから、結果的に、女性にのみ丁寧さが結びついた。これが、「女ことば」と「丁寧」が結びついた理由だと考える。

おわりに

本書から、女ことばという枠を超えて、当時の時代背景、時代に伴う社会情勢の変化、世界情勢についてなど様々な観点から新しい知見を得ることができた。それは、言語を学び、研究する際には、言語のみに注目するのではなく広い視点を持つ必要があることを示している。私は、卒業研究で言語分野を対象にしたいと考えているので、本書で得た知見を活かし、広い視野を持つことを意識して学んでいきたい。



マーク・トウェイン、村岡花子訳『ハックルベリー・フィンの冒険』新潮文庫、1959年

日本文化学科2年　Tさんの読書レポート

はじめに

著者のトウェインは、代表作に『トム・ソーヤーの冒険』などがあげられる作家である。筆者は文学分野の専攻を検討しており、この作品から文学で書かれた当時の文化、考え方に触れ、学ぶことができると考えこの本を読んだ。

要約

ハックルベリー・フィン（ハック）は、トム・ソーヤーとの冒険で大金を得てある家の養子となる。だが、家族との生活に馴染めずトムと夜中に家を抜け出し遊んでいた。また、神に祈っても他人のためになるだけで、少しも自分のためにならないから、と祈らなかった。

冬のある日、ハックは自分が見つけた足跡が失踪していた父親のものと気づいた。お金があると父親にすべて取られると考えると、自身のお金を判事にすべて預ける。その晩、父親がハックを訪ねてきてハックがもっていた少しのお金を奪い、父親は酒を飲み、大暴れし監獄へ入れられる。それを見た判事たちは父親とハックを引き離そうとする。だが、うまくいかず釈放された父親はハックと森の奥の小屋で暮らすようになる。

ハックは森の暮らしに慣れたが、父親の暴力がひどくなったため、父親から逃げ出すことにする。自分が殺されてしまい、金品も奪われたことにして、見つけたカヌーに乗りジャクソン島へ向かった。

ハックが島で過ごしていると、ミス・ワトソンの家にいた黒人のジムと会う。ジムは自分が遠くに売られると考え、家を逃げ出していた。二人はその後、洞穴で暮らす。ハックは、女の服を着て町の様子を伺いに行った。町に住んで日が浅いおばさんは、ジャクソン島にジムが逃げていると考えていた。洞穴に戻ったハックはジムと共に島を抜け出す。

川を下っているうちに、とある二人を助け共に旅をする。その二人は町でインチキを行い、お金を稼いだ。また違う町では、亡くなった人の兄弟と偽りお金を稼ごうとした。ハックは騙されている娘たちを可哀想に思い、お金を返してこの悪党二人から逃げようとする。お金を返すことは成功したが、悪党からは逃げられなかった。

悪党たちは別の町で人を騙そうとしたが失敗し捕まった。ハックは逃げられたが、ジムは逃亡奴隷として捕まってしまう。ハックは共に旅をしてきたジムを助けるために、地獄に落ちてもいいと決意した。ジムを捕らえている家に、嘘をついて入る。それはトムのおばさんの家だった。その家の近くに来ていたトムにジムを助けることを話し、協力してもらう。二人はジムの場所を突き止めて逃がすが、結局捕らえられてしまう。またポリーおばさんが来たことで、二人が嘘をついていたことがばれる。その後、実はジムはミス・ワトソンの遺書ですでに自由になっていたことを知った。

考察

私は、この小説は主人公ハックの考えの変化を描いていると解釈した。先行研究も用いながら、その理由を説明する。

一つ目に、ハックの良心の変化である。ハックは始め、自分のためにならないことは意味がないと考えている。田染によれば「ダグラス夫人に引き取られる以前は、自分で寝起きする場所を決め、自分で食べるものを探し、誰にも依存せず抜け目なく生きてきたため損得勘定でしか物事を考えられないのである。」(21頁)。だが、旅のなかでハックは、自身にとって得にならない行動をする。それは悪党二人が騙した少女に対して、お金を返そうとすることや、泣いていた彼女に真実を話してしまうことである。ハックのこの行動は、悪党二人に気づかれれば攻撃されるため、損にしかならないだろう。このことから、旅をしていくことで、ハックは自身の損得のみで動くという考えを改めていると解釈できるのではないだろうか。

二つ目に、黒人であるジムに対する考え方についての変化である。ハックは当初黒人に対し、白人よりも下の存在であると考えている。鈴木は次のように述べている。

> トムは、（省略）奴隷であるジムを木に縛り付けたいというが、それに対してハックは反対するはするものの、それはトムがそのようないたずらをすれば自分が家にいないことがばれてしまうからというものであり、決してトムのいたずらを非難しているからではない。この時点で、ハックの黒人に対する感情は、トムのそれと、あまり変わらないのである。(41頁)

つまり、大人であるにも関わらず、ジムに対していたずらをしており、からかってもよい存在と捉えている。しかし、ジムと旅をしてゆくにあたって、彼にいたずらをした後怒られ、謝りに行っている。このことから、黒人に関する考え方を大きく変化させているといえるだろう。さらにジムが逃亡奴隷として捕らえられた時も、田染によれば「ハックはジムを人間の尊厳を持った者と見なして、ジムを助けるということを『奴隷を助ける』のではなく、『友を助ける』と考え始める。」(30頁)。奴隷であって何をしても良いと考えていたハックが、ジムに謝り、さらに黒人は奴隷であることが一般的な当時のアメリカ社会において、ジムを友人と捉えるようになっているのである。

おわりに

今回この小説を読み、ハックの一人称視点で話が進むことで、この時代の白人の子供の考えや、黒人への対応に接することができた。また参考文献に挙げた論文には、作者トウェインの黒人に対する偏見が小説の書き方に反映されているとあったため、トウェインが書いた他の作品にも触れて当時の黒人差別、そして現代の黒人差別についてさらに考えてみたいと思う。

参考文献

田染早奈子「『ハックルベリー・フィンの冒険』におけるハックの「良心」の分析」文学研究科篇、『佛教大学大学院紀要』第42号、2014年、19-33頁。
鈴木惠介「『ハックルベリー・フィンの冒険』における黒人表象」神奈川大学大学院外国語学研究科、『神奈川大学大学院言語と文化論集22』、2016年、31-72頁。

石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社新書、2015年

英米文化学科1年　Sさんの読書レポート

はじめに

石田勇治の『ヒトラーとナチ・ドイツ』は、アドルフ・ヒトラーとナチ党の台頭とヒトラー政権の歴史を分析したものである。本書では、なぜナチ時代のドイツで大規模ジェノサイドが引き起こされたのか、どのようにしてヒトラーが独裁者になり、またその政権下ではどのようなことがなされたのかなど、ナチ時代のドイツの歴史が語られている。

本書について

本書は全七章で構成されている。第一章では、オーストリアで生まれドイツ国籍も持っていないヒトラーがドイツの政治界へ進出し、ナチ党の党首となるが、ミュンヒェン一揆に失敗し、投獄されるまでの歴史が描かれている。第二章では、ミュンヒェン一揆の失敗を乗り越え、ナチ党の勢力を拡大するまでが述べられる。1920年代後半から1930年代初頭の世界恐慌などによる経済危機と失業者の増加など社会の不安をうまく利用し、ヒトラーのカリスマ性と演説力によって、多くの民衆から票を集め、ナチ党はヴァイマル共和国の国会第一党へと上り詰めていった。

そしてヒトラーが首相に就任し、ヒトラー政権が誕生する様子が第三章で描かれる。ヒトラーは選挙を勝ち抜いたわけではなく、前大統領ヒンデンブルクや保守派の政治家たちが、ヒトラーを利用するために首相に任命したのだ。彼らはヒトラーを利用し、また政治活動を制御しようと試みのである。第四章では、ナチ体制の確立について述べられる。ヒトラーは、地方の政治の弾圧を行ったり、演説で多くの民衆を魅了していったり、また議事堂炎上令によってナチ党の政敵を排除していていった。そして、授権法を成立させることで、合法的に独裁権力を獲得し、ヒトラー総統が誕生した。

第五章では、ヒトラーが首相に就任した日から第二次世界大戦の開戦日までの歴史について語られている。この期間は「比較的良い時代だった」という声が上がるほど安定した時代であった。なぜそのようなことが言われるのか、またこの時代にどのようにしてヒトラーが国民に人気になったのかについて検討されている。

第六章では、ホロコースト（ユダヤ人大虐殺）が引き起こされるまでの過程が論じられ、最終章では、ナチ優性社会の実態とホロコーストの内容、そしてヒトラーの最期が描かれている。

ナチ・ドイツから私たちは様々なことを学ぶことができる。このレポートでは、石田氏の分析を基にナチ党が利用したプロパガンダについて現代の状況と絡めて考察していく。

メディアとプロパガンダ

まず、ヒトラー政権を確立するにあたって、ヒトラーやナチ党は巧妙なプロパガンダを駆使し、ユダヤ人や精神障害者などを悪者に仕立て上げていき、国民の意識をうまく誘導していった。このプロパガンダを広めるにあたって利用されたのは、メディアである。このメディアは現代でも一般的に利用されており、さらに進化してSNSというものも開発されている。便利なツールとしてつかわれているものだが、SNSはテレビなどのメディアよりもより偏った思想を植え付けることが可能である。「あなたへのおすすめ」のようなものは、自分に関心があるとAIが判断した情報だけを表示している。欲しい情報を得るために、現代人はこうしたシステムを当たり前のように利用している。しかしこれは、ナチ党が利用したプロパガンダと近いものがあり、お互いの顔を合わせずとも、より自然に人々の思想を誘導することが可能な方策であると考えられる。

ヒトラーの時代はメディアも限られている。にもかかわらず、ドイツ全体に反ユダヤ主義やアーリア人優越主義などの思想を広めることができたのは、弾圧などの様々な要因もあるが、人々を魅了する演説した「カリスマ・ヒトラー」の存在だった。「集会活動に力点をおくナチ党にとって、ヒトラーのたぐいまれな観客＝聴衆動員力は、ナチ党を他の急進右派勢力から際立たせると同時に、ヒトラーをカリスマと感じる人びとに根拠と確信を与えた。」ともあるように、ヒトラーの演説は実際にきわめて大きな影響力があったことが理解できる。

もし、ヒトラーのような人が今後登場し、色々な条件がそろえば、ナチ・ドイツは現代でも再び出現するかもしれない。石田は最後に「「ヒトラーとナチ・ドイツの歴史」の歴史は、これに真摯に向き合うことで、現在と、そして未来のための教訓を導き出すことのできる歴史」であると述べている。二度とこのような悲惨なものを生み出さないためにも、この時代の歴史を正しく知ることは非常に重要なことである。今ある情報内で歴史を正しく理解することで初めて、現代の状況にどのように対応すべきか考えていくことができるだろう。また、著者がヒトラーやナチ・ドイツを分析したように、歴史を研究し続ける意義は、今後同じ過ちを起こさないために、より具体的な対策を講じる上で、必要不可欠であると私は考える。

おわりに

本書は、ヒトラーやナチ党の策略、歴史的背景とともにナチ時代のドイツについてとても分かりやすく述べられている。この本を読むことで私はこの時代のドイツについて学ぶことができ、また大きな誤解をしていたことに気が付くことができた。ヒトラーやナチ・ドイツについて興味をもち学び始めようとしている人たちには、まずこの本を読むことを私は勧めたいと思う。

参考文献

石田勇治「ヴァイマル共和国の崩壊と保守エリート」藤原彰・荒井信一編『現代史における戦争責任』青木書店、1990年。
中村幹夫『ナチ党の思想と運動』名古屋大学出版会、1990年。
ハフナー、セバスチャン（瀬野文教訳）『新訳　ヒトラーとは何か』草思社、2013年。

リン・ハント、長谷川貴彦訳『なぜ歴史を学ぶのか』岩波書店 2019年

英米文化学科3年　Sさんの読書レポート

私が紹介する本は、リン・ハントの『なぜ歴史を学ぶのか』である。私がこの本を選んだきっかけはヨーロッパ史概論Ⅰのイントロダクションで、「歴史とはなにか」について学んだことにある。その講義を通して、歴史を学ぶ意義や歴史学を学ぶことの重要性・価値についてより詳細に学びたいと感じたため、私はこの本を読書レポート対象として選択した。本稿において、前半では要約を行い、後半では筆者の考えに対する自分の考えを述べ、なぜ歴史を学ぶかについての考察を行う。

歴史的真実を確定させることは、決定的に重要である。それがなければ、政治家の嘘に対抗することができないからである。歴史的真実は二層構造になっている。第一の段階では事実が問題となり、第二の段階では解釈が問題となっている。事実というものは、意味を与える解釈に組みこまれなければ、動き出すものではない。そして解釈のもつ影響力は、事実に意味を与える力を基盤としている。

歴史的事実は、それが依拠する文書の性質によって決定される。歴史における影響力のある文書のいくつかは、捏造であることが証明されている。世界は山のような歴史的事実によって満たされているが、考慮するのは、ある特定の時点でのごくわずかな事実についてである。私たちが関心を持つ事実は、語りたい物語を可能にしてくれるものなのである。物語を語るということは、私たちの関心を事実に向けるが、それによって論争を引き起こす。歴史家は、同じ出来事に対して異なる事実を強調することによって異なる物語を語っている。この不協和音は、あらゆる解釈に対して疑問を投げかける。

歴史家は常に個人史や社会的文脈によって規定される観点から歴史を記述しているので、その叙述が完全に客観的だと主張することはできない。歴史的事実に関するトクヴィルの主張は、歴史家のあいだで広く容認されている共通規範を基盤としている。あらゆる解釈の真実性は、その首尾一貫性と重要な事実に対する解釈を提供できるかどうかにかかっている。首尾一貫した解釈とは、論理的なものである。それは適切な証拠を提示するもので、その証拠から非合理的な結論を導き出すものではない。

ある歴史解釈が本当の事実に立脚し、論理的に首尾一貫し、できるかぎり完全なものに整序されているときでさえ、その解釈の真実性は暫定的なものにとどまる。新たな事実が発見されることもあるし、完全性の指標も時代によって変化するからである。歴史家たちは、長らく卓越した国民のアイデンティティの語りを提供することによって、国民国家の一体性を支えてきた。そうした叙述を読むと、書かれた当時は気づかれなかった不完全性が明らかとなる。こうした愛国主義的な盲目作用は、世界のいたるところで発生している。しかし、過去の解釈に対する現在の優越性に自己満足する前に、やがて私たちの歴史が同じように不完全なものとして見えてくることを認識しなければならない。

この本を読んで私は、歴史学を学ぶことの重要性として批判的思考を培うことができるという点に着目した。一見したところ、歴史的事実というものは単純明快なものに見えるが、一見してわかるほど事実は単純でない。なぜなら、歴史というものは新たな文書、新たな物証、新たなデータというものが常に発見されており、確立した事実とされていたものが、いとも簡単に覆されるということもありうるからである。このように歴史を学ぶことで、歴史の固定化された事実をただ鵜呑みにするだけではなく、事実の評価や異なる視点の検討を通じて、批判的思考力を養うことができる。

歴史学を学ぶもう一つの重要性として、アイデンティティの形成が挙げられる。私たちの誰もが、家族、近隣関係、エスニシティ、性、地域など、歴史との関連でそれぞれ別々のアイデンティティを保持している。これらのアイデンティティは長い時間を経て形成されたものであり、歴史と密接に関係している。私は歴史を学ぶことは、自分たちの過去を理解し、個人および集団としてのアイデンティティを形成するのに役立つと考える。

また筆者は、「歴史は時間に関わるすべてを対象とする」と述べているが、私もこれに賛同する。身の回りのすべてのものは、その痕跡が容易に可視化される過去二、三世紀といった時代だけではなく、永遠の時間がつくりあげた堆積物なので、時間を経てできたものはすべて歴史と密接な関係があると感じた。このように、過去の出来事や動向が現在にどのような影響を及ぼしているかを理解することで、現代社会の問題や現象をより詳細に理解でき、これも歴史を学ぶ意義の一つなのではないかと感じられる。

歴史を学ぶことは、私たちの過去を理解し個人および集団としてのアイデンティティの形成に役立つ。また、歴史は単一の物語ではなく、多様な視点や解釈が存在する。したがって、歴史を学ぶ際に特定の事実や一面的な解釈だけを鵜呑みにするのではなく、批判的思考力を培うことが重要である。また歴史の学び方として、過去の出来事や動向が現在にどのような影響を及ぼしているかを理解することが大切である。歴史を学ぶことは、単に過去の出来事を学ぶことではなく、現在、そして未来を生きるためにこそ重要であることに、我々は改めて目を向ける必要があるだろう。

城戸毅『マグナ・カルタの世紀―中世イギリスの政治と国制　1199―1307』東京大学出版会、1980年

英米文化学科3年　Yさんの読書レポート

はじめに

私は、今回の読書レポートでは、『マグナ・カルタの世紀―中世イギリスの政治と国制　1199―1307』を取り上げた。マグナ・カルタとは、1215年、イギリス・プランタジネット朝の国王ジョンに対し、封建諸侯と都市代表が共同して認めさせたもので、王権を制限し、諸侯の既得権と、都市の自由を規定し、イギリス憲法を構成する重要な憲章とされている。全文63ヵ条からなる長文な条文なため、大憲章は「大」、カルタは「憲章」を意味するラテン語であった。今回取り上げた本では、1199年から1307年に起きたことが説明されている。

要約

１３世紀初頭、フランス北西部の家領を失ったアンジュー家が、その回復やヨーロッパ各地における同家の利益を追求する手段としてイングランド諸侯の財産を利用しようとしたとき、近代立憲主義の種は蒔かれた。国王家のわがままによって財産を搾取されることに抵抗した諸侯が、国王権力を縛るためのルールを樹立したところに、マグナ・カルタが成立する。マグナ・カルタは国家権力を国民が縛る近代憲法の原型であったとされる。

考察

私は本書で特に印象に残った点が2つある。

1つ目は、第1章の大憲章という節だ。マグナ・カルタのことをこの本では、大憲章と表していることが多い。ここでは、1215年の大憲章は法であるか否かということが問題となっているため、以下では大憲章と表す。著者は、この点については、これを簡単に法であるということはできないと述べている。その中には、その後、法として確立したものと、そうでないものがあり、またそれまでに法的慣行として確立していた点とそうではない点があるからである。むしろ諸侯が法として確立させたいと望んだところをのべたものが、1215年の大憲章であるとも言われている。

私は、このように述べられていることに納得をした。なぜなら、法とは程遠いような内容がいくつか見られたからだ。特に、封建貴族以外の階層を特に配慮した条項はきわめて少ないのであるが、それにも関わらず諸侯をも含めた自由人一般についての言及は、大憲章のうちにはきわめて多いという点が挙げられる。ここでは、自由人一般の人々と、その他の人々への配慮に大きく差が生じることとなる。現在、法というのは特別な例外がない限り、誰にとっても平等なものでなければならないという考えがある。そのため、その考えが一般的とされている環境下で生きている私にとっては、大憲章を法と考えることはできない。

そして、この点は大憲章に対する評価からも感じた。評価からは、大憲章を獲得した運動の主要な担い手は、封建貴族上層部であり、大憲章において彼らがめざした第1の目的は、彼らの財産の返却だったこと、彼らの考えた「全国土の共同体」も25人委員会という大諸侯グループによって指導されたものだったことは事実であると述べられ、全ての人が平等ではないことがよく分かる。

2つ目は、エドワード一世治世末期の政治危機とその背景の過程にある、1番の大きな問題についてだ。その問題とは、臣（国民）の王（国家）に対する金銭的・物質的・人的負担義務の是非のことだ。エドワード一世治世に進むと、特にカペー戦争が始まった1294年以降は、露骨な恣意的課税が聖職者に対して、また商人に対して行われたのであった。臣と王の関係には、どうしても身分の差による上下があるものだ。しかし、王は臣を法律や権力によって、守るのが役目であると考える。そのため、金銭的・物質的・人的負担をかけるようなことは、起きてはならない。また、商人が権力を振りかざさないよう抑制するのも、王の役割である。当時は、そのような面での統制や法がなかったため、臣が苦しむようなことが多々起きてしまったと考える。法や統制の重要性を感じる章であった。

おわりに

以上のように、『マグナ・カルタの世紀　中世イギリスの政治と国政1199―1307』を読んで、マグナ・カルタの社会への影響、そしてマグナ・カルタの問題点が印象に残った。特に、問題点に関しては、マグナ・カルタが法の役割を果たしていないことから、曖昧な点も多く残されていた。それにより、苦しむ人々も見られたため、法の存在の重要性を感じた。マグナ・カルタが法の役割をしていたならば、当時の状況は大きく変わっていただろう。

本のタイトルにもある通り、中世イギリスの政治と国政にも大きく影響を与えたマグナ・カルタは、歴史に残る存在であったことがよく分かった。この本を踏まえ、私は、マグナ・カルタの内容を改善していく取り組みが、不十分であるという感想を持った。そして、それはよりよいものにできなかった、王の責任でもあるだろう。また、マグナ・カルタが法の役割を果たしていたのならば、当時はどのような状況であったのか想像を膨らまし、考え、理解を深めたいと感じた。

G.サルガード、松村赳訳『エリザベス朝の裏社会』刀水書房、1985年

英米文化学科1年　Oさんの読書レポート

私は、『エリザベス朝の裏社会』を読み、特に第４章の「白魔女と黒魔女」に着目した。この章では、白魔女と黒魔女の役割や、社会的立ち位置について説明されている。例えば、「魔女」と聞くと、箒の柄にまたがって空中飛行しているイメージや、「魔女」＝魔術を使うという認識もあると思う。しかしこの本には、魔女が箒の柄にまたがって空中飛行をしていたという話はイングランドの魔女裁判ではたった１回出てくるだけで、そのようなことをしていたという確かな証拠も全然ないといった内容や、まじないや病気の治療、遺失物捜し、埋蔵財産捜し、犯人捜しといったこ需要が多かった、といった内容の記述があった。

そもそも、現代での魔女表象と歴史上の実際の魔女は、なぜこんなにもかけ離れたものになってしまったのだろうか。現代で魔女といえば、前述したように箒にまたがって空を飛び、魔術を操る、あるいは毒薬を作ったりするイメージがある。実際に身近なところでいうと、ジブリ作品「魔女の宅急便」でも、主人公のキキなどが箒にまたがり、空を飛んで移動をしている場面が何度も登場する。しかし、実際に魔女がそのようなことを行った証拠は少なく、根拠がない。そこで最も多くの人が持っているであろう、魔女が箒にまたがって空を飛ぶというイメージは、一体どこから、なぜ生まれたのかについて考えたい。

一つ目の仮説は、魔女狩りの際、人々が騒動に乗じて実際にはありもしない憶測を口にし、それが広まっていったというものだ。歴史上でも現代でもよくあることだが、何か大きな事件や騒動があったとき、人々は他人から聞いた情報を鵜呑みにし、それを少しずつ自分の言葉に変えて拡散する。そのため、誰も事実を知ろうとはせず、ただただ新しい情報を求める。そして、根拠のない空想の話が事実のように話され、定着してしまう。これと同様なことが魔女狩りの際にも起こり、確かな証拠も根拠もない、魔女は箒にまたがって空を飛ぶという嘘の情報が広まり、現在の常識になったのではないかと私は推測した。

二つ目の仮説は、魔女が箒を常に持ち歩いていたからというものだ。魔女や魔法使いは、常に杖を持ち歩いているというイメージを多くの人が持つと思うが、その杖と同様に箒も魔女にとって必須の道具だったのではないか。常に持ち歩いている様子から、誰かが想像を膨らませ、一つ目の仮説と同様に、ありもしないことをあたかも事実のように語り、拡散したのではないかと推測する。以上二つのことが原因で、魔女は箒にまたがって空を飛ぶという根拠のないイメージが生まれ、今日の常識となったのではないかと私は考える。

他方で、本題である魔女が行っていたまじないは、現代の占いや宗教と共通する部分があるのではないかと考えられる。魔女が行っていたまじないにはいくつもの種類がある。例えば、「歯痛を治したり戦闘中に守ってくれるまじない、賽子賭博や恋愛に成功するまじない、牛を雷や病気から守ったり子供を寝かしつけたりするまじない、小麦をみのらせたり音楽の才能を伸ばしたりするまじない」などがあった。また前述したように、紛失したり盗まれたりした財産や家畜をみつけることや遺失物捜し、埋蔵財産捜しも行っていた。

現代で恋愛成就や豊作、才能開花、勝負運、魔除けなどのことは、占い師に運勢を見てもらい、お祓いやまじないをかけてもらったり、各自の信仰対象に祈ったり、信仰場所に行き、お祓いをしてもらったりする。このことから、現代では占い師や宗教や信仰対象という存在がまじないのようなことを行っているだけであって、それは魔女と同じ役割を担っているといえる。占いも宗教も、どちらも信じたからといって必ず願いが叶うわけでも、運気が上昇するわけでもない。各自が信じ、意識したから願いが現実となり、占いや宗教にまじないの力があると思い込み、また頼ろうと思う。「祈りはぜったい間違いない魔除けではなく、神への謙虚な嘆願であって、叡智と慈悲によってそれを取り上げてくださるかどうかは神様しだいである。」と本文にもあるように、絶対的なまじないというものは無く、各自がどれだけ祈り、信じて意識した行動を取るかが現実になる可能性を引き上げる要因になると考える。この考え方は、現代の占いや宗教だけではなく、魔女のまじないにもいえることである。魔女のまじないも絶対に効くという根拠はなく、人々が信仰の拠り所としていただけなのではないか。一方で、遺失物捜しや埋蔵財産捜しに関しては、まじないではなく精霊を用いるため、現代の占いや宗教とは異なる魔女特有の技術といえる。

以上のように、魔女と現代の占いと宗教には同じ役割や社会的認識、存在意義があるといえる。このことから、一見大きく異なるように見える魔女、占い、宗教という三つの存在は同じような役割を担い、人々の信仰の拠り所となっているといえるだろう。